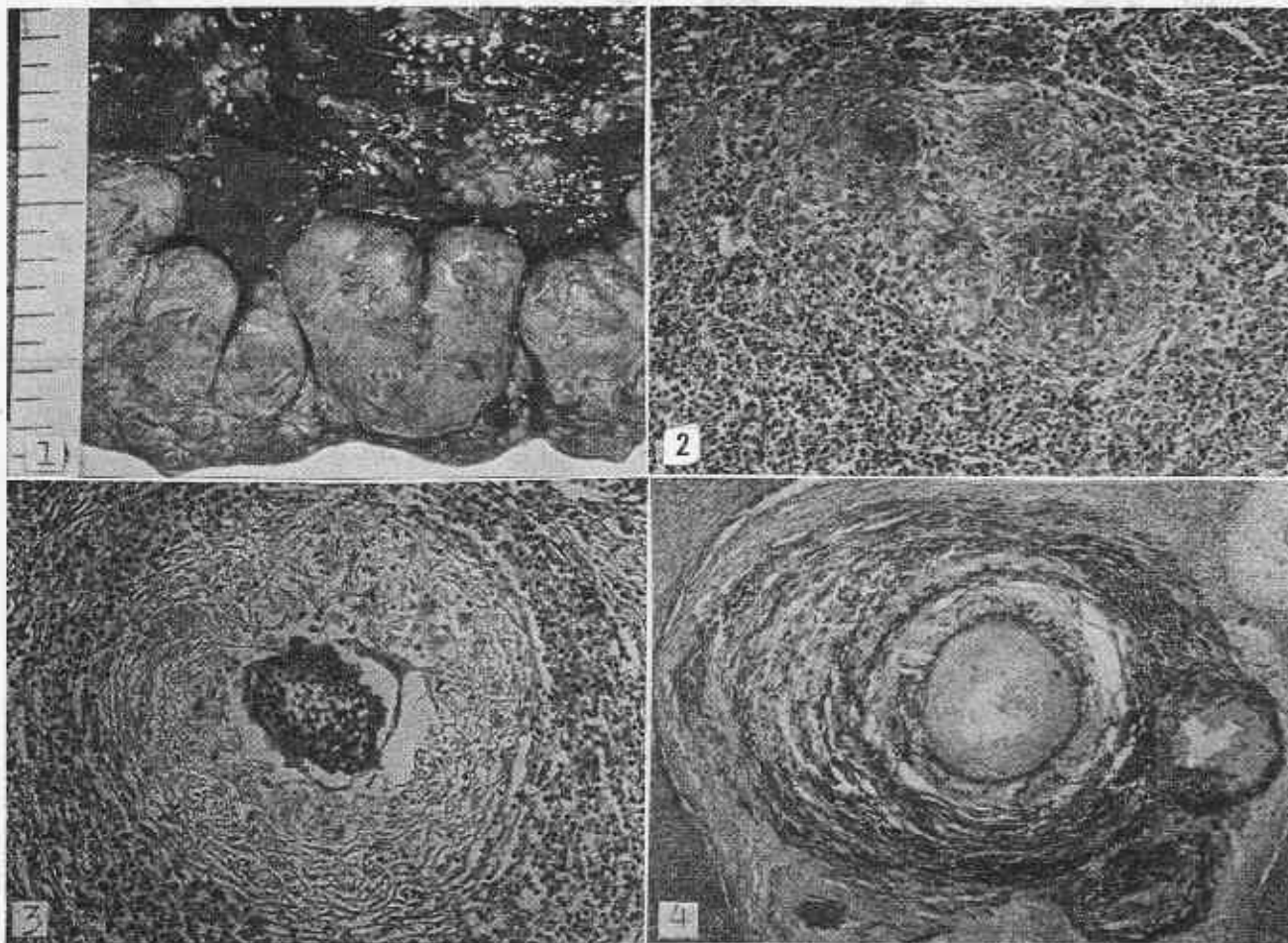


馬の石灰化を伴った慢性間質性増殖性肝炎

日本大学農獣医学部獣医学科第2病理学教室出題・第6回病理学研修会標本 No. 76



昭和39年12月24日に芝浦と場でと殺解体されたもので、種類、年齢、性、産地および病歴など不明である。検索材料は肝、肺、肺門リンパ節、心、腎、脾および横隔膜などで10%ホルマリン固定とした。

肉眼的所見：肝には粟粒大～核桃大あるいは母指頭大のクリーム色を呈している腫瘤が散発的にあり、特に辺縁部に著明で、腫瘤は密発融合して、これら腫瘤には石灰化を伴っている(写真1)。肺の一部に鶏卵大の硬結(石灰化を伴っている)が認められる。肺門リンパ節は腫大し、石灰化著明である。腎には黄白色の粟粒大結節が多数集合し、限局性に数個存在している。その他胸膜炎が著明で、肺胸膜、心外膜、横隔膜(胸、腹両面)、肝包膜および脾などには絨毛が顕著に新生している。

顕微鏡の所見：肝の腫瘤部には輪状(肥厚血管の断面様)に線維性結節状増殖が認められ、石灰化が著明である(写真4, H-E染色, $\times 50$)。この輪状結節性増殖の周囲には部位により好酸球を、あるいは好中球を主とし、またリンパ球や組織球および巨細胞などが多数浸潤している。特に好酸球の集簇部で真菌症の病巣を思わせ

られるような像もある。しかし写真2(H-E染色, $\times 100$)においては線維芽細胞が増加し、さらに経過すると写真3(H-E染色, $\times 100$)のごとき像へと移行するようにも思える。その他臓器の肉眼的病変の認められた部(絨毛根部などにも)には巨細胞、リンパ球、組織球などからなる結核様の組織像を呈していて、その他肝で認められた好酸球や好中球の参加はなく、また石灰化は肺と肺門リンパ節に認められ、その他には認められない。

以上の所見より結核を考えたが結核菌染色(Ziehl-Neelsen および Anilin-Fuchsin 染色等)は陰性であり、また真菌症も疑い Gridley 染色や PAS 染色等を施したが陰性であった。一方、原因体の検出ができなく結核類似の病巣が全身性に認められるので Sarcoidosis も考えてみた。しかし肝のみの肉眼的および顕微鏡の所見では虫卵が認められないが Charicosis に最も類似していると考えられる。

診断：研修会において行なわれ、病理組織学的変化像より標題のごとく石灰化を伴った慢性間質性増殖性肝炎とされた。